

## 史料紹介と研究

## 東京大学史料編纂所新収

## 『明月記』断簡について

遠藤 珠紀

## 一 はじめに

本稿では史料編纂所が二〇二〇年三月に購入した藤原定家（一一六二～一二四一）の日記『明月記』断簡一幅を紹介したい（左頁図版参照）。この断簡は本所村井祐樹氏がネットオークションで見い出され、購入に至ったものである<sup>(1)</sup>。村井氏の慫慂により、代わって簡単な紹介をさせていただく。

本断簡は現在、掛幅装とされており、本紙は縦二九・二糎、横一三・四糎、六行分の断簡一紙である。本紙の天地はやや裁断されて、文字の一部がわずかに欠けている。表装は比較的新しく、昭和年代のものと推測される（本所修復室高島晶彦氏のご教示による）。「定家 明月記」との外題題箋が付されている。塗の二重木箱に納められ、「京極黄門定家卿（墨方印「琴山」）」という極札一点が付随する。内箱の蓋上書に「藤原定家卿 明月記」、蓋裏には「廿四日天陰午明崩云々 江守賢治鑑職（朱印）」と記されている。箱書を記した江守賢治氏（一九一五～二〇一一）は国語・国文学研究者で、氏の手になる古筆の箱書は他にもみられる<sup>(2)</sup>。

## 二 翻刻

次に翻刻を掲げる。

其後退出、

廿四日、天陰、午時微雨、漸密、少時休、

午始許、布衣参岡前大納言殿御仏事所、如日來、

中陰三度、世以為追從歟、身已依此事

被憚院中面々、願主難去之間、不顧傍難、

太似無由、是偏禁裏微忠之由存之、但於亭

主等猶不出好詞、光家相具、能季卿先在

（首書）  
「又向岡崎大納言、如何事」

この断簡は内容から、『明月記』建暦三年（一二二三、一二月に建保改元）五月二三日条の末尾から二四日条の冒頭と推測される。『明月記』は治承四年（一一八〇）から没する仁治頃まで記されたことが確認されている。自筆原本も多数残り、その多くは定家の子孫である冷泉家に伝わる。一方で歌人としても著名な定家の筆跡は珍重され、一部は巷間に流出した<sup>(3)</sup>。『明月記』建暦三年五月記も散逸しており、断簡の形で所々に所蔵されている<sup>(4)</sup>。写本も多数作成され、この断簡部分の内容は写本によって知られている。後述の明月記研究会による成果、また近年刊行された『冷泉家時雨亭叢書 翻刻明月記』二では、慶長年中書写の国立公文書館所蔵六四冊本を底本としている<sup>(5)</sup>。本断簡と本文に異なる部分はないが、「又向岡崎大納言、如何事」という首書は、写本には見えない。

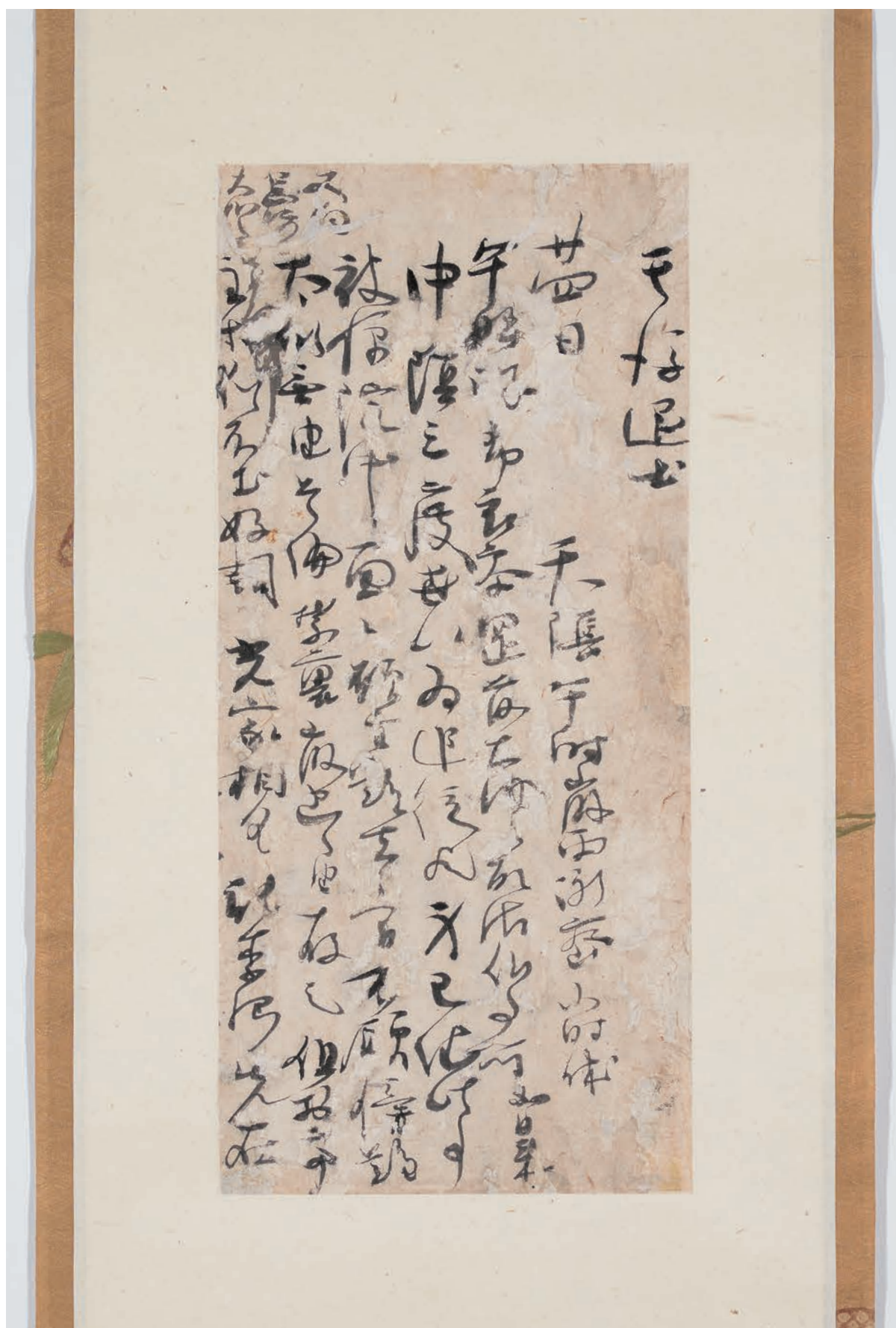
なお五月二四日条については、本断簡のほか個人蔵、鶴見大学所蔵（一誠堂主人酒井宇吉氏の旧蔵）の二つの断簡が確認されている<sup>(6)</sup>。ただしいずれも本断簡に直接に接続する部分ではない。先述の国立公文書館所蔵六四冊本には、五月記全体が含まれており、おそらく江戸時代以降に細かく分けられたと推測される。

『明月記』の原本は時期により形態が異なっていることが、山本信吉氏・尾上陽介氏により明らかにされている<sup>(8)</sup>。すなわち

一…紙背文書なし。天地に界線を引き記事を清書したもの。

二…書状などの反故を裏返して再利用し、天地に界線を引き記事を清書したもの。

三…書状などの反故を裏返して再利用し、界線を引かずにそのまま記事を書きつけたもの。



『明月記』断簡

の三種に大別される。本断簡は天地の罫線は見られず、やや左下がりにばらばらな書きぶりとなっている。紙背は相剥をされているが、一行目下方などに墨痕が見られ、元来は紙背文書が存在したと推測される。すなわち三番目の様式となる。尾上氏の分析によれば、建暦三年はまさに三番目の様式の時期であり、適合する。この三番目の様式は行の幅や文字の大きさがばらばらで書き直し、挿入など推敲の跡も存在し、清書前の状態であると指摘されている。

また、首書・日付・天気・干支の表記についても時期的な傾向があるという。建暦三年は、定家による首書があり、連続した日付で記され、天気が書かれ、干支は記入がある時もある、という時期であり、この点も本断簡と適合する。筆跡からも藤原定家の自筆原本と比定してよからう。

### 三 内容

最後に内容を見る。建暦三年当時定家は五二歳で従三位侍従（非参議）であった。『明月記』建暦三年五月記については、明月記研究会による講読の成果があり、本稿ではその成果に拠りながら紹介する<sup>9)</sup>。

二三日、定家は順德天皇中宮藤原立子の中御門殿に参り、退出した。本断簡にはその末尾四字（「其後退出」）のみ見える。二四日には、この年四月五日に亡くなった藤原範光の七七日仏事が行われた。定家は大納言殿藤原良平の仏事所に、子息光家とともに赴いている。五月一〇日の五七日、二二日の法事に続く三度目の参仕である。この参仕につき定家は、追従と見られるであろう、また後鳥羽院中の人々に避けられているが、「禁裏微忠」であると頻りに述べている。この月一四日に七条院（後鳥羽院母藤原殖子）が熊野詣に出発するため、後鳥羽院は近臣たちに範光の仏事に参加しないように命じていた（五月一〇日条・一五日条）。そうした中で、定家は子息為家の代わりに法事に参加した。亡くなった範光は、叔父藤原範季の猶子となっており、その範季の娘修明門院重子が順德天皇の母にあたる。このため範光の仏事に参ることが禁裏への忠義（「禁裏微忠」）になると考えたと推測される

という。また「願主難去」という思いもあった。この「願主」を『明月記研究』では範光子息藤原範朝とする。しかし「於亭主等猶不出好詞」と亭主範朝に対しては一步おいた感情も窺える（五月一四日条も参照）。定家が主家である藤原良平（範光の女婿）の仏事所に参じていること、二四日条の続く部分では、参加をねぎらう良平の仰せや、仏事の布施取に関する良平の「御命」に背きたい旨が記されている。故人の追善仏事は縁者により順に主催される慣行であった。あるいはこの日の法事の願主は藤原良平だった可能性もあろうか。さらに本断簡で初めて判明した首書には「又向岡崎大納言、如何事」とあり、やはり定家としては参加に懸念があったことが推測される。記事の内容は既知のものであるが、所在不明だった自筆原本が見い出されたことは意義があると考えられる。以上、簡単であるが新収史料の紹介とさせていただきます。

### 注

- (1) 本所の請求番号は〇〇七三一八。近日、本所所蔵史料目録データベースで書誌・画像が公開される予定である。史料原本は燻蒸待ちのため、しばらくは画像でのみ閲覧可能である。
- (2) 例えば早稲田大学図書館所蔵「宗因句短冊「なかむとて」」など。
- (3) 尾上陽介「『明月記』解題」『新天理図書館善本叢書五 明月記』八木書店、二〇一五年。尾上陽介「『明月記』原本の特異性」『日本文学研究ジャーナル』二、二〇一七年など参照。
- (4) 尾上陽介「『明月記』原本及び原本断簡一覧」『明月記研究提要』八木書店、二〇〇六年。
- (5) 公益財団法人冷泉家時雨亭文庫編、朝日新聞出版、二〇一四年。
- (6) 紅葉山文庫本、特〇九七—〇〇二、第四三冊。
- (7) 中川博夫「鶴見大学図書館蔵『明月記』断簡」『明月記研究』三、一九九八年。
- (8) 山本信吉「藤原定家の筆跡について」『古典籍が語る』八木書店、二〇〇四年、初出一九九九年。尾上陽介「『明月記』原本の構成と藤原定家の日記筆録意識」『明月記研究』五、二〇〇〇年。尾上陽介「中世の日記の世界」山川出版社、二〇〇三年。
- (9) 明月記研究会「『明月記』（建暦三年五月）を読む」『明月記研究』九、二〇〇四年。